

靖國神社秋季例大祭

に参加して

片山 博仁 陸自80

平成29年10月18日、秋季例大祭当日に偕行社の一員として初めて参加させて頂いた。連日の雨天続きであったが、当日祭は見事な秋晴れに恵まれた。午前9時30分までに参集殿に集合完了し、10時10分前頃までに拝殿左方前列から4列目で、本殿が前方に見渡せる好位置に着座する。

隣には大東信祐氏が座られ、靖國神社の由来や特質、エピソードについて丁寧に説明して下さった。氏は、私が富士学校の学生時代に普通科部長であり、雲の上の方であったことを思うと、夢の様であり隔世の感がある。本殿に上る階段の左右の外側には錦の御旗が眩しくはためき、その内側には真柵が四つ並べられ、右側の最も内側には「内閣総理大臣安倍晋三」とあった。

10時、徳川宮司が所定の座につかれ、国歌を斉唱する。君が代の歌詞は和歌であるため、これを2回斉唱すること初めて経験した。

10時半、陛下からの勅使が到着し御幣物が奉しられる。拜殿の一同は一斉

にこれに正対して勅使をお迎えし、そしてお見送りする。

次いで、國學院大学吹奏楽部とコーラス部によって「鎮魂頌」「靖國神社の歌」が演奏・斉唱された。通常神社で演奏されるのは雅楽であることを思うと、非常に不思議な印象を受けた。

また大東先輩から、本殿に向かって右奥に月桂樹が植えられていることを教わった。表現が不適切かも知れぬが、靖國神社が非常にユニークな神社であることを改めて理解した。

次に、大菱・高齢の方を含む特別参列者や崇敬者総代が、神社の役員に支えられながら玉串を奉り拝礼された。

続いて徳川宮司からご挨拶があり、関連行事や事業等について報告されるところにも、直近の行事やイベント等について紹介があった。

最後に、我々参列諸員も本殿に進み拝礼奉つて、拝殿から右方階段を降りた所でお神酒を戴き、本殿に向かって献杯した後、参集殿に引き下がった。

なお、この間、中国から日本に帰化した評論家の石平（太郎）氏や、デビ夫人をお見かけた。おそらく他にも多くの有名人が参列されていたのだろう。

以上が当日祭への参加概要であるが、実際に式場へ行ってみて初めて実感できる感覚を盡知した。

昭和32年生まれの筆者にとつて、戦前と戦後の間には歴史感覚上の断層が存在するが、ここ靖國に来てみると、何故かこの断層の彼岸との連続性を回復し、体感するのである。

式典の間、祝詞や演奏を聴きながら、私の意識はふとタイムスリップし、戦前・戦時中の光景が心に浮かんだ。拝殿には礼装に身を包んだ帝国陸海軍の軍人達とともに、新しく合祀される黒い和服の軍人・軍属の遺族が正座していたことであろう。

1869年に東京招魂社を設立し、79年に靖國神社と改称したが、最も大切なもの、即ち命を国家のために捧げた軍人・軍属がここ靖國に祀られるという儀礼は、帝国陸海軍軍人の精神的支柱を下支えする礎石となった。この精神が求心力となつて、日本は非欧米民族国家として唯一、ほぼ独力で産業革命に成功し、日清・日露戦争を勝ち抜いて列強の一員としての地位を得るに至つた。これは歴史認識というよりは史実である。

よく「日本は他のアジア諸国を植民地化したことを心から反省していない」との、実しやかな意見を目にし耳にするが、これは少なからず主体性と時間性の観点を無視した議論ではなからうか。

主体性においては、日本人としての

当事者意識が欠落しており、いわゆる日本不反省論者は、実際に歴史を行動した先達の苦勞や艱難辛苦を理解しようとしないうちにおいても共通している。

また時間性においては、法学における事後法の禁止の原則を無視するのと同じ通つている。戦前までの歴史は弱肉強食の帝国主義の時代で、これは当時の世界地図を見れば明白である。独立国と言えたのは、欧米列強と日本、そして例外的にタイくらいで、他は(半)植民地であった。欧米列強はあくまでも古いルールの下で覇権を争っていたわけである。

したがって、殆どの植民地が独立し、民族国家の平等の原則が確立された戦後の視座(パラダイム)で戦前の日本の行動を裁くことは、事後法禁止の原則を無視するのと相似であろう。

戦後、マッカーサー將軍がいみじくも明言したとおり、大東亜戦争は米英仏蘭に対しては自衛戦争であり、アジアは侵略の対象ではなく防衛の対象であった。

最後に、数年ぶりに遊就館を訪れたが、変化と言えば外国人訪館者の増加ぶりである。喜ばしいことであり、必ずや日本の歴史的立場を中立的かつ妥当に理解してくれると信ずるものである。